

SUMMERTIME

PCM vs DIRECT

SIDE-A (PCM) 1.YESTERDAYS (J. Kern-O. Harback)
 2.WHO CAN I TURN TO (A. Newley-L. Bricusse)

SIDE-B (DIRECT CUTTING) 1.SUMMERTIME (G. Gershwin)

TSUYOSHI YAMAMOTO TRIO + ISAO SUZUKI



■ごあいさつ

オーディオファンの皆様、日頃は第一家庭電器を御愛顧頂き誠に有り難う御座居ます。おかげ様で、当社は創立20周年をむかえる事が出来ました。これもひとえに、皆様に支えられてのこと……と存しております。DAMと致しましても創立20周年と、アクセサリー領布会第10回を記念致しまして、このレコードを製作致しました。DAMオリジナル録音第4弾は、今人気絶頂の山本剛トリオとベース、チェロにかけては実力、人気ともに隨一の鈴木勲のベストコンビの熱演です。この熱演をあますところなくお楽しみ頂く為に、今回は、片面PCM録音、片面はダイレクトカッティング、なおかつ45回転ハイレベルカッティング、更に、より良い音を求めて、贅沢な厚手プレス盤と致しました。片面は今、話題のPCM録音に取り組んで、テープヒスのない、クリアでダイナミックな音を収録致しました。もう一方の片面のダイレクトカッティングもすばらしい出来映えで当然テープヒスなどは全くないクリアなサウンドです。PCMとダイレクトカッティングを比較して両者それぞれの違い、良さをお楽しみ下さい。今回の録音はDAMのオリジナル録音で、1曲づつPCM録音とダイレクトカッティングを同時に行いました。それはアーティストがほとんどプレッシャーを感じずに、十分にのった良い演奏を出来る様に……と考えたからです。なお、今回のPCMとダイレクトカッティングの同時録音以外に、更に76cm/sec 16chで、同時にマスター・テープを作りました。全く同じ音源で、テープでPCM録音と通常録音の違いを比較したいとお考えの方には、現在実施中の“録音システム電撃作戦”で用意致しましたDAMオリジナルマスター・サウンド“PCM VS 76サマータイム”が御座居ますので、御参考にして頂きたいと思います。

最後に、この記念盤の製作にあたりまして“山本剛トリオ”“鈴木勲”並びに“東芝EMI株”関係各位の皆様に絶大な御協力をいただきました事を心から御礼申し上げます。またオーディオファンである会員の皆様、この記

念盤を末永く御愛用頂ければ幸いです。

DAM 推進委員会

■制作にあたって

毎回斬新な企画で我々を喜こぼしてくれているDAMが今度はPCMとダイレクトのカッティング・アルバムを制作するので、その手伝いをして欲しいとの申し出があり、私もそのスタッフに加えて頂くことになったわけであるが、私自身、PCMもダイレクトも別々のレコードで聴いてはいたが、同一条件のもとに作られたものを比較した事はなかったし、またそういうレコードもなかった様に思う。

そんな訳で、非常に興味を引かれ、喜んで協力させてもらうことにした。

アルバムの内容はジャズということは決定していたのだが、ダイレクトを前面に出すこととアーティスト側にかかるプレッシャーが大きくなり、ジャズの生命ともいえるアドリブの面白さを充分に引き出すことがむずかしいという点と、演奏内容が充実したものでなくては、いくら音質が優っていても無意味であるということを考え、あくまでも何度も何度も録り直しのきくPCMをメインとして進行することにした。そして費用がかさむのを覚悟で同時にカッティング・マシーンも回し、もし良いテイクが録れたら片面をダイレクトとすることでDAM側の人達と意見が一致した。

今回選ばれたアーティストは“ミステイ”(TBM-2530)でスイング・ジャーナル誌ジャズ・ディスク大賞最優秀録音賞を受賞し、ジャズ・ファンだけでなくオーディオ・マニアもその虜にしてしまった山本剛トリオに人気、実力No.1のベーシスト鈴木勲をソロイストとして加えるという豪華な顔合せとなった。

選曲は山本剛と相談の結果、ファンの人達にもなじみ深く彼等も何回も演っているもの3曲とした。

レコーディングはリハーサルで多少時間は食ったものの、ダイレクトの為の予備を含めて大体3テイクで録り終え、アドリブもダイレクトを意識して萎縮する様な事は全くなく伸び伸びとした演奏であり、当初の我々の心配などすっとんってしまった。

このアルバムを聴いて頂ければおわかりになると思うが、ダイレクト・テイクの“サマータイム”的なスリルにあふれた演奏などは、とかく演奏内容が単調になりがちであると批判される事の多いダイレクト・ディスクとは一味違った魅力を引き出させたと確信している次第である。

■レコーディング(PCM VS DIRECT) にあたって

このレコーディングは9月11日に東芝EMIの第一スタジオで、PCMとダイレクトの他に万一のトラブルにそなえ76cm/secの16chマスター・レコーダーも同時に用意して行った。

使用したPCMユニットはオーレックス製のデジタル・プロセッサー MARK Iでビデオ・コーダーはソニーのUマチックである。

PCM録音方式は従来のアナログ方式と比べワウ・フランジャー、ダイナミック・レンジ、スピード偏差、周波数特性、S/N比などの点で格段に優れていると言っても良いだろう。

そして聴感上でも、今までテープヒスに消されてしまっていたピアニッシモにおけるかすかな余韻も充分に聞き取ることができその広大なダイナミック・レンジを感じられる。

そして、今回このように数々の利点を持つPCMとダイレクトを同時に行なったわけであるが、PCM録音とダイレクトではマイク・アレンジも当然異ってくる。しかし、それでは厳密な意味で両者の音質比較が不可能であるし、同じ曲を何テイクも演ってもらってはミュージシャンの負担も大きくなってしまう。そこでミキサーの渡部氏と話し合い、最大公約数的なマイク・アレンジで同時に録り、セッティングやイコライジングは曲想に合わせて変更するだけにとどめた。

ピアノはノイマンM-269×2をオンに、ショップス221-B×2を若干オフにし、ピッコロ・ベースはフェンダーのプレシジョン・タイプのピック・アップとAKG-224Eのブレンドを行った。

本番は午後1時ぐらいから開始されたが、

当日予定していた3曲はもうすっかりおなじみのナンバーであるし、メンバーも何度も演奏したことのあるものであったので、リハーサルはあまり必要としないと考えていた。しかしオマさん(鈴木勲)が当前の演奏をしたのでは、聴く人が面白くないだろうと言うことで、スローのピアノ・ソロで始ったり、3拍子を混ぜたり、16ビートを使ったり、とかなり趣向を凝らしてくれた。そして、どの曲も彼等が今迄に演ってきたスタイルとは全く違ったものになつたので各曲の本テイクをスタートする迄にかなり時間がかかってしまった。

しかし、その間に我々としては綿密な音決めをすることが出来たので、むしろ好結果であったと言える。

また、演奏内容もマンネリ化せずに、變化に富み、緊張感のあるものとなり、我々も楽しみながらレコーディングを進められた。

全曲を録り終ったのは7時頃であったが、楽器のかたづけを手伝いながらオマさんに、いつこの日のレコーディングの為のアレンジを考えたのか聞いたら、なんと自宅からスタジオ迄の車の中という答えであった。まったく彼の天才的な閃きには頭が下ってしまう。

そして、このアルバムに収められている、*Yesterdays, Who Can I Turn To, Summertime.*の3曲はいずれも素晴らしい出来栄えで、ジャズのだいご味を充分に堪能できるものとなった。

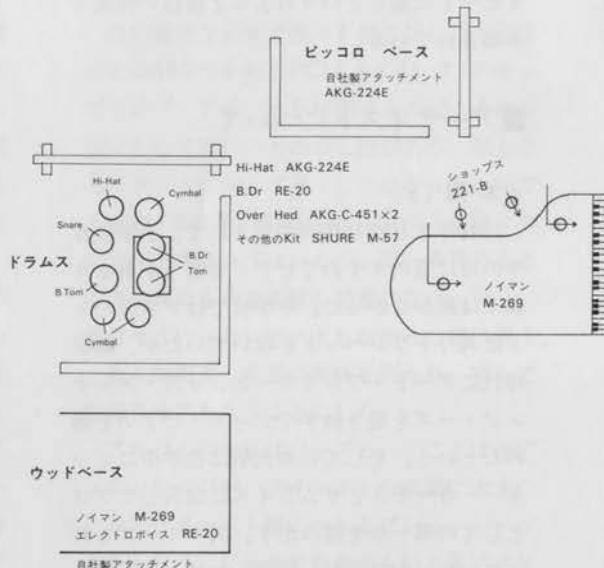
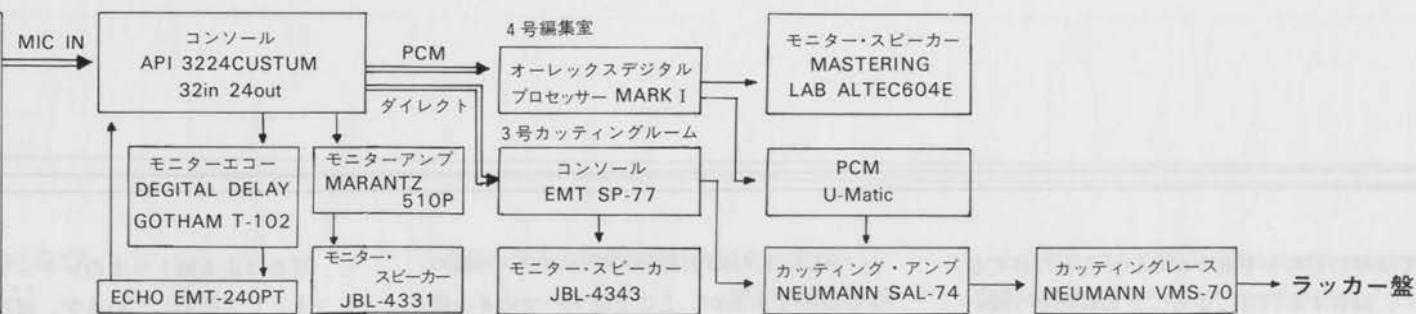
ここで編集とカッティングの方法についてふれておくと、PCMは従来のアナログ録音の様にハサミを入れて、OKテイクだけをぬき出し編集するというわけにはいかないのでカッティング用のマスターを作るためには何回かコピーをすることになる。

しかし、PCMはプリントを何回繰り返してもそのクオリティーが劣化することはないのである。

まず、オリジナル・マスターから必要なテイクを別のビデオ・テープのビデオ・トラックにプリントしカッティング・マスターを作る。次に、それをまた別のテープにコピーし、最後に3本目のテープから最初に作ったカッ

ブロック・ダイアグラム、カッティング

東芝第一
Mスタジオ



ミキシング・ルーム MIXER WATANABE



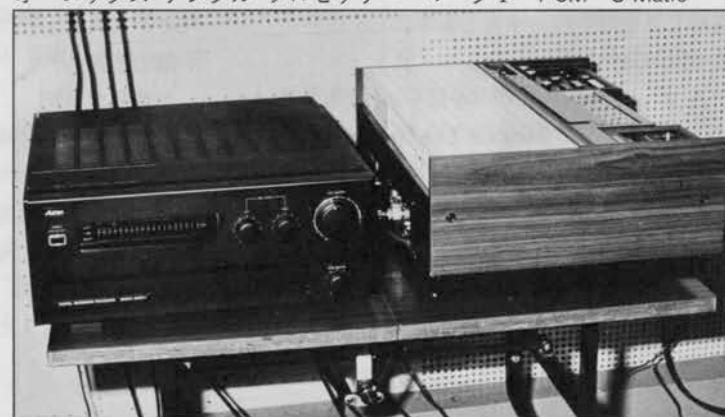
DIRECT



ダイレクト カッティング中 NEUMANN VMS-70

PCM

オーレックス デジタル プロセッサー マーク I PCM U-Matic



レコード材質及び製造プロセスについて
は、東芝EMIプロフェッショナル、レコード仕様と同様現時点最高の製造技術を導入して品質の安定化を図っております。
尚このレコードはハイレベルでカッティングされている為、トレーシング時には針トビ、ピリツキ、等でレコードを傷つけやすい切削状となっています。
再生時には特にアームのラテラル、インサイドフォースのバランス、及び再生針の摩耗状態、針圧（メーカー指定の重い方にセット）には充分気を付けて下さい。

● 30センチ45回転レコードの取扱いについて

このレコードは、通常の33⅓回転レコードと変わった点はありませんが、念のため次のことに御注意下さい。

(1)オートプレーヤー、オートチェンジャーでも使用出来ますが、ある特殊なものでは完全な自動演奏が出来ないこともあります。このような場合、手動方式に切替えてお取扱い下さい。

(2)33⅓回転レコードより線速度が早いので、針先のトレース性は良くなりますが、カートリッジを含むトーンアームの慣性などで軽針圧の場合正確にトレースしないこともあります。歪みなどの恐れのある場合針圧を許し得るまで増して下さい。

(3)回転が早くなるために、レコードの反りの影響が33⅓回転にくらべて出やすくなります。レコードの保管、取扱いには充分注意をして下さい。

●このレコードはカッティングレベルが一般のレコードに比べて大幅に高くなっていますので、カートリッジアームの調整が悪いと歪や針飛びを起すことがありますので御注意下さい。

●再生する部屋の温度が低いと、カートリッジが正しく作動しないことがありますので室温を15°C~20°C位に保って下さい。

レコード材質——プロユース材料使用

レコーディング 東芝EMI第1スタジオ

&ダイレクト カッティング s.53.9.11

カッティング(PCM) s.53.10.5

アレンジャー 鈴木 熊

ディレクター 小林 貢

ミキサー 渡部喜久

カッティングエンジニア 岡崎好雄

プロデューサー 小山正敏

企画 第一家庭電器株DAM

製造 東芝EMI株式会社